

中国のほんの話(62)

文豪と漢詩 (其の参)

～ 會津八一 『鹿鳴集』 ～

蔭山 達弥

いりひさす きびのうらはを ひるがえし
 かげこそわたれ ゆくひともし

日本の歌人・美術史家・書家として著名な會津八一(1881.8.1～1956.11.21)は、大正十二年、唐詩の中でも日頃愛唱していた詩を長い期間かけて訳詩し、『印象』と題して九首の短歌にした。『印象』は自著、歌集『鹿鳴集』に収められている。『自註鹿鳴集』(岩波文庫 緑154-1, ISBN4-00-311541-4)の解説によると「會津八一はその晩年、歌集『鹿鳴集』に自ら註を付すことに没頭した。」とある。「いりひさす」は唐代の詩人、耿湊(こうい)が詠じた『秋日』の漢詩を短歌に翻訳したものである。『印象』序文に會津八一はこう記している。

「かつて唐人の絶句を誦(じゆ)し その意を以て和歌二十余首を作りしことあり ちか頃古きひきだしの中より その旧稿を見出し 聊(いささ)か手入などするうちに 鶏肋(けいろく)＝ニワトリの肋骨：大した価値はないが捨てられない物のたとえ)の思ひさへ起りて ここにその九首を録して 世に問ふこととなせり 或はこれを見て 翻訳といふべからずとする人あるべし また創作といふべからずとする人もあるべし これを思うて しばらく題して印象といふ されど翻訳にあらず 創作にもあらずとて果して何物ぞ これ予が問はむと欲する所なり」

會津八一は、江戸後期の歌人、千種有功(ちぐさ ありこと, 1796～1854)が『唐詩選』の五言絶句七十四首、七言絶句百六十五首をことごとく和歌にした『和漢草』(わかくさ)に出会い、これこそが「印象」というものなのだという。そして八一もその試みに入っていった。『唐詩選』に入っている張九齡の『照鏡見白髪』(鏡に照らして白髪を見る)がそれである。

宿昔青雲志 蹉跎白髮年 誰知明鏡裏 形影自相憐(原詩)

いくとせか 心にかけし 青雲を つひにし
 らがの 影もはづかし(『和漢草』)

あまがける ころろはいづく しらかみの
 みだるるすがた われとあひみる(會津)

さらに井伏鱒二の『厄除け詩集』の訳
 シュッセシヨウト思ウテキタニ ドウカスル
 間トシバカリヨル

ヒトリカガミニウチヨリミレバ 皺ノヨッタ
 ヲアハレムバカリ

大岡信氏は『こんこん出やれ』(『海』昭和52



年8月号)の中で、「會津八一の訳と、井伏鱒二の訳を並べて眺めながら、私はおのずと頬がゆるむのをおさえることができない。これらの訳は、何とそれぞれの訳者そのものであるうか、と思う。」と述べている。

もう一首、韋応物の『秋夜寄丘二十二員外』
 懷君屬秋夜 散步詠涼天 山空松子落 幽人
 応未眠(原詩)

あきやまの つちにこぼるる まつのみ
 おとなきよひを きみいぬべしや(會津)

ケンチコヒシヤヨサムノバンニ アチラコチ
 ラデブンガクカタル

サビシイ庭ニマツカサオチテ トメモオマヘ
 ハ寝ニクウゴザロ(井伏)

『芸術新潮』1995年2月号～1998年7月号まで連載の『秋の野をゆく 會津八一の生涯』に加筆訂正がなされた『野の人会津八一』(新潮社, 2000年, ISBN4-10-422002-7)の新刊帯には「生涯、独身にして芸術と学問に刻苦勉強し、独自の美学を確立した奇なる天才、會津八一。破天荒なエピソードに彩られたその人生にまだ隠れていた逸話を掘りおこし、真の芸術家像に迫る。」と書かれている。著者工藤美代子は「會津八一は偉大な芸術家であり、学者であった。しかし、それと共に、なんととも変わった人間だった。奇人変人と呼んでもいいだろう。」と述べている。昭和八年三月から十二年にわたって、孤独な八一の傍らにあって、献身的に尽し、最後は八一に看取られて三十四年の生涯を終えた高橋キイ子という女性がいた。かけがえのない伴侶を失った八一は『山鳩』という歌集をつくった。

いとのかきて けさをくるしと かすかなる
 そのひとことの せむすべぞなき

ひとのよに ひとなきごとく たかぶれる
 まづしきわれを まもりこしかも

かげやま たつや(教授・中国文学)